

第5回 世界ハラール・フォーラム（WHF）開催

イスラーム研究所シャリーア専門委員会
科学委員会副委員長 **小林 榮三**

第5回 世界ハラール・フォーラム “State of The Industry : Market Access & International Trade” は、6月21日と22日の2日間にわたってマレーシアのクアラルンプールにあるコンベンション・センターで開催された。約40カ国900人のハラール製品製造企業、販売者、科学者・学者、宗教者などが参加した。拓殖大学イスラーム研究所からは、同時に開催されたMIHAS、JAKIM主催ハラール認証認可団体会議、世界ハラール評議会（WHC）理事会に参加のため3人がマレーシア入りしたが、フォーラムには科学委員会的小林1人が参加した。21日は飛行機到着時間の関係で、参加できなかったが、オープニング・セレモニーにはマレーシアのナジブ・ラザク首相も出席し、現在、ハラール産業が世界経済の大きな市場に成長していることを強調し、マレーシアがその最前線の役割を担う決意を述べた。

続いて、2日間にわたって以下のセッションが行われた。



フォーラム会場風景

一日目

パネルディスカッション：State of The Industry

オープニング・セレモニーに続いて、JAKIM（マレーシア連邦政府総理府マレーシア・イスラーム開発局：Islamic Development Department Malaysia）、HDC（Halal Industry Development Corporation）、IHI（International Halal Integrity）、CIMB Islamic Bank、フランスESSECビジネススクール、英国Cardiff Universityによる表題の討論が行われた。

セッション2：ハラール産業の現状

- ① イスラーム法の規定から見た世界ハラール基準の展望（ク

ウェート大学 Dr.Mohammad F.M.S. Al Motairan)

- ② 世界ハラール市場の現状（フォーラム事務局）
- ③ ハラール・ルールと実施の動向—消費者の要求とハラール認証（英国Cardiff大学 Dr.Haluk Anil）
- ④ 産業の課題と挑戦—ハラール認証機関から（オーストラリア・ハラールフードサービス Ali Chawk）
- ⑤ パネルディスカッション（IHI、ブラジルCIBAL Halal）

二日目

セッション3：ハラール産業における国際貿易と規定

- ① ニュージーランドにおけるハラール産業の規定（ニュージーランド、Food Safety Authority）
- ② 競争を保証するためのハラール基準化の必要性（マレーシアDirector of Strategic Management Division Standards Malaysia）
- ③ パネルディスカッション（IHI、マレーシア獣医局、マレーシア農業・農産物省、マレーシア Sains Islam 大学教授 Dr.Muhamad Muda）

セッション4：食品市場におけるハラール性の保証

- ① 国際的人道支援のためのハラール食品保証システム（スイス、赤十字国際委員会）
- ② ハラール産業における企業倫理と責任：CCMグループの実例（マレーシアCCM）
- ③ ハラール産業における多角的流通と製造チェーンの統合（フランス・マルセイユ港）
- ④ パネルディスカッション（フォーラム事務局、フランスESSECビジネススクール、中国青海省海外貿易推進評議会CCPIT）

セッション5：決議

地域的・国際的ハラル産業成長の推進、ハラル貿易の推進、互恵的・多面的貿易におけるより良い市場アクセスの保証、多国組織の協力、価値観・動物福祉・倫理・消費者の要求を統合したハラル、今後の展望)

ワークショップ：ハラル製品市場

- ① 市場の概観、ムスリム消費者の増加
- ② 世界市場の必要性と消費者の動向
- ③ ハラル製品の重要性和製造費
- ④ その他の課題

パラレルセッション：遺伝子組換え作物（GMO）とハラル

- ① 遺伝子組換え稲—その衝撃（スリランカ Dr.John Bennet）
- ② バイオ作物の世界的状況—発展途上国の受ける恩恵（イラン Dr.Behzad Ghareyazie）
- ③ イスラームとGMO（クウェート Dr.Hani Al-Mazeedi）
- ④ パネルディスカッション（パキスタン Dr.Anwar Nasim、クウェート Dr.Mohammad F.M.S.Al Motairan、マレーシア JAKIM、マレーシアHDC）



GMOセッション会場風景

「イスラームとGMO」の講演に於いてDr.Hani Al-Mazeediは、「ムスリムにとってGMOとは単なる食の安全性の問題というだけではなく、導入遺伝子の起源が“ハラル”か“ハラーム”かの問題である。したがってムスリムは、すべてのGMO製品にその表示を要求する。導入遺伝子の起源がハラルであればGMO製品はハラルであるが、豚のようなハラーム動物の遺伝子が起源である場合はハラームまたはhighly questionableである。」と述べ、ムスリム社会におけるGMOの諸問題について講演した。現在、GMOの問題はハラル世界基準の統一にとって、重要な課題となっており、さまざまな場・機関で議論されている。

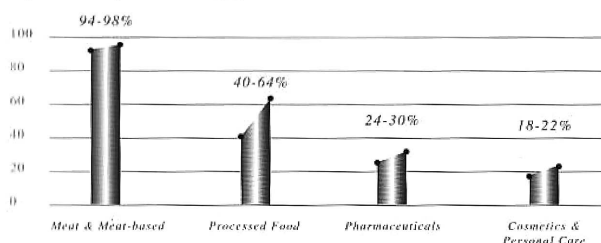
このフォーラムとMIHAS開催は、ムスリム人口とハラル市場の拡大（図表1）を背景にして、ハラル製品流通のハブ国家を目指すマレーシアの力を全世界にアピールするものだった。今、ムスリム消費者のハラルへの関心は食品市場から医薬品、化粧品にまで拡大し（図表2）、金融界にも及んでいる。

国・大陸名	人口 (百万人)	ムスリム人口 (百万人)	食品支出額 (一人当たり・米ドル)	ハラル食品市場規模 (百万米ドル)
世界合計	6,475.4	1,565.3	n.a.	547,409
アジア	3,921.0	1,043.7	350	365,299
西アジア	213.8	185.3	572	111,712
インドネシア	221.9	195.3	347	67,769
中国	1,311.1	39.2	156	6,115
マレーシア	26.1	15.4	381	5,867
タイ	65.0	5.9	371	2,189
アフリカ	906.0	461.8	200	92,360
ヨーロッパ	727.4	51.2	1,500	76,800
北米	329.0	6.6	1,750	11,550
南米	559.0	1.6	500	800
オセアニア	33.0	0.4	1,500	600

(出所) Malaysia, "The Third Industrial Master Plan, 2006 - 2020"

(図表1)

Figure 1: Average Awareness Level



(出所) The 5th World Halal Forum, The Executive Review 2010、数字は2008年と09年の比較。

(図表2)

また、マレーシアは、Department of Standards Malaysiaの作成する「マレーシア・スタンダード」を世界のハラル基準にしたいという意向をもっている。しかし、現在ハラル基準は、マレーシア・スタンダードの他にも、インドネシアのLPPOM-MUI、イスラム諸国会議機構（OIC）、世界ハラル評議会（WHC）などでも論議され、統一基準作成の模索が続いている。

7月23日～25日には、インドネシア・ジャカルタでGlobal Halal Forum、International Training on Halal Assurance System(HAS)(本誌次号で報告予定)、International Meeting on Halal Standard、第1回ハラル・ビジネス・食品EXPOが開催された。

これら一連の動きは、国際貿易市場におけるハラル製品の重要性を全世界に強烈に印象づけた。

「JAKIMハラル認証認可団体会議2010」 参加報告

イスラーム研究所シャリーア専門委員会委員 遠藤 利夫

2010年6月24日（木）マレーシア連邦の首都クアラルンプールで開催されたJAKIM主催による「ハラル認証団体会議」（The meeting of recognized Halal certification bodies）に参加したので報告する。

2010年6月現在、JAKIMが認証している団体数はアジアをはじめアメリカ、ヨーロッパ、南アフリカなど24カ国48団体となっている。日本の場合は（宗）日本ムスリム協会（判定は拓殖大学イスラーム研究所が行っている。）のみが認定を受けている。国別の内訳は次の通りである。（JAKIMリストの掲載順。カッコ内は団体数を表す。）オーストラリア(13)、オーストリア(1)、アルゼンチン(2)、ベルギー(1)、ブラジル(1)、ブルネイ(1)、中国(3)、チリ(1)、デンマーク(1)、フランス(2)、ドイツ(2)、インド(1)、インドネシア(1)、日本(1)、オランダ(3)、ニュージーランド(2)、パキスタン(1)、フィリピン(2)、シンガポール(1)、南ア(3)、台湾(1)、タイ(1)、米国(3)、ベトナム(1)。このうち今回の会議に参加したのは、17カ国24団体であった。

今回の会議の主要議題はマレーシアのハラル認証基準MS1500の2004年度版を改訂した2009年度版の説明であった。マレーシアにおけるハラル認証の発行は一時HDCに移管されたが、昨年度からJAKIMに戻った。今後は海外からの依頼に対してJAKIMが直



会議参加者集合写真

接査察にでかけるとの説明があった。

また、ハラル検証システムの一つとして、製品に豚由来物が入っているかどうかを分析する検出機器（機器はアメリカの会社が製造）についてマレーシア・ブトラ大学のヤアコブ博士から説明があった。

「MIHAS（マレーシア国際ハラル展示会）2010」 参加報告

イスラーム研究所シャリーア専門委員会委員 遠藤 利夫

2010年6月23日（水）から同27日（日）の5日間に亘りマレーシアの首都クアラルンプールで開催されたMATRADE（マレーシア貿易開発局）主催による「マレーシア国際ハラル展示会2010」（Malaysia International Halal Showcase 略称MIHAS）に参加したので報告する。

このMIHAS（ミハース）は、毎年マレーシア政府がイスラーム教徒向けにイスラーム法上、合法的なハラル製品市場の窓口的存在になるべく支援して行っているイベントの一つで、マレーシア国内外の企業から出されている出展物は、食品を中心に化粧品から医薬品まで多岐に渡っている。開催は今年で7回目となる。例年5月に開催されていたが、今年は中国・上海での万博と重なったため1ヶ月遅らせての開催となった。来年度は再び5月に開催される予定になっている。会場はクアラルンプールにあるMATRADE展示・会議場敷地内の特設会場であった。同展示会にはマレーシア国内企業が364社、海外からは163社が参加した。日本からも数社が出展していた。

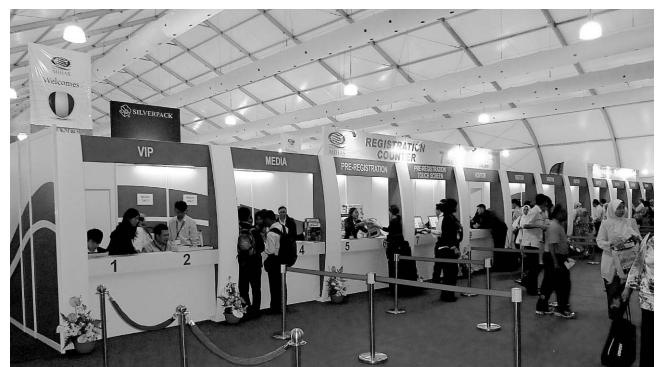
今回が初参加となった国は、アルバニア、ベルギー、イタリア、ガンビア、香港などである。ブース数は650を超える。また一般展示会前の2日間は商談会が開催されたが、国内からは900社、海外からは54カ国381社が参加した。会場での成約額は昨年度より10%増の2億2千4百リンギット（約78億円）が見込まれる。



MATRADE 本部建物

今回会場で特に目立ったのは中国各省からの製品の展示で、中国政府のイスラーム市場への熱意が感じられた。

展示されているハラル製品は、その原料から製造にいたるまで厳格な検査をパスしていることから、将来はイスラーム教徒向けだけでなく世界の一般消費者からも支持される製品になる可能性を秘めているようである。



会場受付風景



展示会場風景

多文化社会のムスリムに関する国際会議に参加して

イスラーム研究所シャリーア専門委員会委員 **新井 卓夫**

「多文化社会のムスリムに関して」をテーマに2010年7月14日から16日の3日間、シンガポール市内のグランド ハイアット シンガポールで国際会議が開かれ参加した。シンガポール イスラーム宗教者評議会 (Majlis Ugama Islam Singapura 以後MUISと表示) が主催し、MUISアカデミー、オックスフォード大学東洋研究所、メルボルン大学国立イスラーム研究センター、国立シンガポール大学マレー研究所が協力して開催された。参加者は国内の各イスラーム団体代表者・責任者をはじめ、一般参加者としてホワイトカラー、学生、主婦ら約180名がフロアを占めた。



特に女性の参加が多かった。また海外の参加としては、日本、中国、香港、台湾、韓国、フィリピン、タイ、マレーシア、インドネシア、ミャンマー、スリランカ、インド、オーストラリア、ニュージーランド、英国、イタリア、ノルウェー、米国だった。

開会式ではMUIS会長のムハンマド アラミ ムサ氏が歓迎の挨拶をし、次にオックスフォード大学アントニオ学部東洋研究所のターリク ラマダーン教授が講演。次に主賓として出席したシンガポール政府のゴ チョクトン上級相が挨拶した。

第一セッションでは「多文化主義の現在と将来」をテーマに本論に入り、基調講演はMUISの副ムフティファトリスバカラム師が行った。続いてメルボルン大学スルターン オマーニ ア



ラブ・イスラーム研究所長のアブドラー サイド教授、ロサンジェルスへのブライ ユニオンカレッジ中世ユダヤ・イスラーム研究所のルーベン ファイアストン教授、インド ジャーミア ミリア イスラミアでザーキル ホセイン イスラーム研究所長のアクタルワーセイ教授が講演した。尚各セッションには司会者がついて各講師を紹介し、スピーチの後フロアの聴衆の質問を受けるシンポジウム形式で進められた。



第二セッションでは「現代イスラーム思想」をテーマにニューヨークのコルドバ研究所所長のイマーム ファイサル アブドルラオフ師、台湾人でマレーシア イス

ラーム思想・文明研究所主任教授のイブラヒーム ゼイン師、デトロイト社会政策・協調研究所のサイードカーン教授が講演しフロアの質問を受けた。

第三セッションでは「イスラーム

の思想と改革」のテーマで、オックスフォード大学のターリク ラマダーン教授 (前掲)、ジャカルタ シャリフ ヒダーヤトッラー国立イスラーム大学のアジュマルディ アズズラ教授、ミシガン大学アラブ・イスラーム学部のシェルマン ジャクソン教授が講演した。

翌2日目の第四セッションでは「組織化と実践」をテーマにインド バンガロー国立法科大学のDr.ヨギンダー スィカンド師、シンガポール マネージメント大学Dr.ユウジン タン法科準教授、米国ハートフォード神学校・倫理学のヘディ ハドセル教授が講演した。

第5セッションでは「ムスリムの社会貢献」をテーマにノルウェーイスラーム評議会のイマーム・会長をしているスネイド コビリカ師、米国ボルチモアで文明間交流・財団の会長をしているDr.ムハンマド バシャル アラファート師、英国ラマダーン財団会長のイマーム ムハンマド ウマル師が講演しフロアからの質問に答えた。

カントリーレポートではカナダから米国ムスリムに関するカナダ委員会執行委員のイハサーン ガルディー師、台湾からDr.イブラヒーム チャオ リヤド・台湾経済文化代表部代表、フィリピンからイスラーム民主化委員会のアミーナ ラスール バルナド女史、イタリアからイタリア イスラーム評議会副会長のイマーム ヤヒヤ バラビニ師、タイからタイ イスラームセンター財団会長パコロン プリヤコーン教授、インドからイスラームの声のナジャ アタウッラー女史が報告した。

3日目は視察日に充てられ、シンガポールのパイオ・ナノ先端技術研究所、慈善団体メンダキを訪れた。またこの日の夜8時から当国の環境水資源相でムスリム事案担当のDr.ヤコブ イブラヒーム氏が司会進行をされ、コルドバ研究所所長のイマーム ファイサル アブドルラオフ師 (前掲) が「許容し合う人間性」をテーマに講演した。尚コルドバ研究所はムスリムと欧米間の関係改善をテーマとしている。

この国際会議はマイノリティーとして生活するムスリムが共通して抱える周辺の多文化社会と如何に向き合うかをテーマとしている。そういう意味では日本、韓国、台湾、中国

とそれぞれ国の事情が違っても共通した状況がある。シンガポールにはムスリムが国民の15%で、約50万人がムスリムとして社会で共存するための課題に積極的に取り組んでいる。

今回主催者となったMUISは政府の管轄下にある法人で、当国で発給しているハラール証明は政府の認可により独占的に行っている。



ザイド派の歴史と教義

イスラーム研究所所長 森 伸 生

はじめに

近年、イエメン北部で反政府組織ホウシー武装勢力と政府軍との紛争が報じられるなかで、武装勢力の宗派がシーア派の分派・ザイド派であるとの説明が行われていた。

そのシーア派とは、アリーとその後裔こそが預言者の正当な後継者であり、ウンマ（イスラーム共同体）の指導者であると信じて、彼らに忠誠を誓う人々のことである。シーア派は後裔のうち誰をイマーム（ウンマの長）とするかという系統論とイマームの本質論の違いによって多くの分派に分かれている。

シーア派の多数派はイランの国教となっている12イマーム派である。12人のイマームを信じ、12番目のイマームは御隠れになり、現世の終わり近くにマハディー（救世主）として世直しのために再臨してくると信じている。

12イマーム派の5代目イマーム、ムハンマド・パーキルに対して、その弟ザイドを支持した一派がザイド派である。ゆえに、ザイド派結果的に12イマーム派のマハディー再臨を否定している。

さらに、12イマーム派の7代目イマーム、ムサー・カーズィムに対して、その兄イスマイールを支持した一派がイスマイール派である。

ザイド派をより詳しく知るために、「イスラーム世界における諸学派と諸分派百科事典第六巻」エジプト・宗教省2009年のザイド派の項目を基にしてザイド派の歴史と教義について解説する。

1 ザイド派

ザイド派はイマーム・ザイド・ビン・アリー・ビン・ハサン・ビン・アリー・ビン・アビータール（698頃 - 740）を支持する人々たちである。第一代イマーム・アリー（ - 661）の孫であり、ザイド派にとって第五代目イマームである。

ザイド派はシーア派の中でも中庸的であり、スンナ派に近いとみられている。法学的にはハナフィー法学に依拠している。神学的にはムウタズィラ学派の影響を受けている。さらに、第一代イマーム・アリーが真実のイマームとしても、スンナ派の第一代カリフ・アブーバクル（573頃 - 634）と第二代カリフ・ウマル（592 - 644）の在位を否定することはなかった。

ザイド派は「蜂起」を重視する。「蜂起」とは真理のイマームを樹立するために奮闘することである。これはイマーム・ザイドがウマイヤ朝のカリフ、ヒシャーム・ビン・アブドルマリク（在位724 - 743）に対して蜂起したことによる。

この「蜂起」はザイド派の中でも重要な教義となっている。ザイド派の主張によると、統治者の不義に対して沈黙することは不正と不義を増大させることであり、さらに、預言者の家系の者たちに侮辱と屈辱を与えることになる。つまり、不義な支配者たちは預言者の家系の者たちを迫害と屈辱で従わせようとするからである。

そこで、ザイド派は第一代イマーム・アリーと息子の第二代イマーム・フサイン（626 - 80）の「蜂起」に従うことが求められて

いる。ゆえに、ザイド派の歴史は「蜂起」と「殉教」によって語られるのである。

2 「蜂起」と「殉教」の歴史

イマーム・ザイドは先に記したように第10代カリフ・ヒシャームに対し、738年に蜂起し、人々から忠誠の誓いを受けた。

イマーム・ザイドが戦闘に入る前に、仲間を鼓舞するために説教を行ったところ、一部の者がアブーバクルとウマルについて質問をしたので、それに対して、「二人に対して、善きことしか告げることではない」と答えた。さらに、ウマイヤ家の者との戦いについて問われ、「私は不正を働くウマイヤ家に蜂起したのである。彼らは自分自身と預言者の家系の者たちに対して不正を行った。そこで、アッラーの書によって行動するように、アッラーの書に戻るように、スンナにもどり、ビドア（逸脱）を消すため、そしてウマイヤ家の不義と不正を正すために蜂起したのである。」と答えた。しかし、彼の言葉は一部の者たちに受け入れられず、彼らはイマーム・ザイドの許を去った。そこで、彼は彼らに、「あなた方は私を見捨てた」と言った。ゆえに、彼らは見捨てる者（ラーフィディー）と呼ばれるようになった。彼らはイマーム位をすでに死んでいる兄のムハンマド・パーキル（731年没）を通してその子ジャアファル・サーディクに移譲されたとして、その人物を擁立したのである。彼らとは後の12イマーム派の者たちである。

イマーム・ザイドは支持者とともに戦場へと向ったが、一本の矢が彼の額に刺さり、命を落とした。739年12月、クーフアにてのことである。

イマーム・ザイドの死後も、ウマイヤ朝のカリフたちに対して、さらにアッバース朝のカリフたちに対してザイド派の蜂起は続いた。イマーム・ザイドの後を継いだ息子イマーム・ヤヒヤーはウマイヤ家第11代カリフ、ワリード・ビン・ヤズィード（在位743-4）に対し蜂起して743年に殺害された。ヤヒヤーの後には、ハサンの末裔であるムハンマド・ビン・アブドッラーがアッバース朝第二代カリフ、マンスール・ダワーニキー（在位754-75）に対して蜂起して762年に、それから彼の弟、イブラーヒーム・ビン・アブドッラーも同年に殺害された。

このように、蜂起はザイド派の人々によって続けられた。785年には、アッバース朝第4代カリフ、ハーディー（在位785-6）に対して蜂起したが失敗に終わり、この闘いの後に、マグリブへ逃げ延びたハサンの末裔イドリース・ビン・アブドッラーの手によって、イドリース王朝が建てられた。

一方、ザイド派の新国家がタバルスタンに建設された。ザイド派のイマームの一人、ハサン・ビン・ザイド（通称ウトルーシュ、 - 917）がカスピ海南岸の地方を征服し、ザイド派のイマームを称しザイド派の国家を建設した。彼の後は、彼の子孫がその地でイマーム位を保っていた。

ザイド派の歴史の中で最も政治的に影響を残した運動は、イマーム・ハーディー・イラルハック（859 - 911）（ヤヒヤー・ビン・フサイン・ビン・アルカーシム・アッラッシー・ビン・イブラー

ヒーム・ビン・ハサン・ビン・アリー・ビン・アビーターリブ)の運動である。彼は893年にイエメンに移り、そこでザイド派の教義を広めた。イエメンへ移ったのは、北部山岳地帯の部族間抗争を調停するため、と言われている。しかし、彼は最初の時、イエメン人の間に支持者を見つけることはなかった。それから、4年後に再びイエメンへ戻り、サアダへ移り、ザイド派の宣教を宣言した。彼はそこでイマームとして人々に忠誠の誓いをうけ、ザイド派の統治を行った。一方で、彼はイエメンで広まっていたイスマール派のカルマト派に対して、闘いを挑み、5年間戦闘を行った。彼の後を、彼の息子、アハマド・ビン・ヤヒヤーが継ぎ、やはりカルマト派に対して戦闘を25年間以上も続け、936年にサアダで死んだ。最後に、イスマール派がイエメンを制圧したが、ザイド派思想はイエメンの人々に受け継がれていた。16世紀ころからオスマン帝国の支配下となったが、近現代になり、イマーム・ヤヒヤー・ビン・マンスール・ビン・ハミードディーン(1869 - 1948)が1904年にトルコ帝国に対して蜂起し、ザイド派のムタワッキル王国(1918 - 1962)を建て、1962年9月のイエメン革命まで続いた。革命は政治的にザイド派国家の終わりを告げたが、ザイド派の宗派が途絶えることはなかった。イエメン人の三分の一がザイド派であり、とくに山岳地域の住民はそうである。

3 ザイド派の教義

ザイド派の基本的な教義では以下の通りである。

(1) **イマーム位**：預言者は後継者としてイマームを指名した時、名前を示さず、イマームの特質を示した。アリーがこの示されたイマームの特質を持っていたが、サハーバ(預言者の教友たち)はアリーを預言者の後継者には選ばなかった。彼らはイジュティハード(解釈行為)にて間違いを犯したのであって、そこには墮落や不信があるのではない。

ザイド派はこの基本的な考えによって、他のシーア派(12イマーム派)と見解を異にしている。12イマーム派は、預言者はアリーを名指したと主張している。

(2) **イマームの条件**：イマーム・アルハーディー・イラルハック、ヤヒヤ・ビン・アルフサイン(859-911)は次のように示している。「イマームはハサンとフサインの子孫からである。二人の人生同様に人生を歩んだ者、二人を模範とする者である。イマームは敬虔であり、信仰厚く、正しく、清廉であり、アッラーの道のために奮闘努力する者であり、現世の諸事において禁欲的である。何が必要かを理解している者であり、諸事万端詳細を知り尽くしている者であり、完全な勇敢さを持っており、献身的であり寛大である。このような者がハサンとフサインの子孫から出たならば、忠誠を誓うべきイマームであり、ウンマは彼を支援すべきである。」

まとめると、1) ハーシム家(ファーティマの末裔)、2) 敬虔であり信仰心篤く、3) 禁欲的であり、4) 勇敢であり、5) 識者であり、6) 寛大であること。7) これらの条件を備えた者は自ら宣教者となり蜂起することが求められ、ウンマは彼を支援しなければならない。

(3) 優れたイマームと劣ったイマームの存在：

ザイド派は優れたイマームがいるのにもかかわらず、劣った者がイマームとなることを可とした。それはザイドが、優れたイマーム・アリーがいるにも関わらず、アブーバクルがイマームとなったことを受け入れていることによる。ザイド派の知識人は、アリーはアブーバクル、ウマル、ウスマーンよりも優秀であるが、ウンマの公益が彼らのカリフを定めた、と言っている。民衆にとってアリーよりも三人のカリフの方に信頼があったということであろう。

イマーム・ザイド後のザイド派たちの一部は、優れたイマームが存在するにも関わらず劣ったイマームが就任することに対して立場を保留している。優れたイマームがイマーム位に就任することが義務であり、実際に劣ったイマームが就任したことについて黙認することはありえないと彼らは言う。このことによってザイド派の分派の間で、アブーバクル、ウマル、ウスマーンに対する立場が違っている。

(4) 二人のイマームの存在：

ザイド派は二つの地域に二人のイマームが出ることを認めている。イマームの条件を二人が備えているのであれば、二人への忠誠は正しいとしている。

この基本的信条は多くの議論を生んでいる。これはイマーム・ザイド本人が言ったことなのか、それとも、彼以後のザイド派が言ったのか。

イマーム・ザイドは、「私はアッラーの書と預言者のスンナを人々に呼びかけ、そして、スンナを呼び起こし、ビドアを死滅させる。あなた方が聞き入れれば、あなた方にとって統治者は良きものとなるであろう。拒絶すれば、私はあなた方に代理とはならないであろう。」と戦う前に呼びかけているが、この呼びかけがある限り、彼は同時に二人のイマームへの忠誠の誓いを許すとは考えられない。それは法的に禁じられている分裂を煽ることになるからである。

4 ザイド派の分派

ザイド派の分派については、神学者アシュアリー(873/4 - 935/6)は著書に、六つの分派があると言っている。それはジャーロード派、スライマーン派、サーレフ派、ブトリー派、ナイーム派、ヤアコブ派である。神学者シャハラスターニー(1086 - 1153)は最初の三派を挙げている。しかし、サーレフ派とブトリー派は同じとしている。

ザイド派各分派は以下の点で異なることはない。イマームはアリーとファーティマの子孫であること、クルアーンとスンナの施行をめざして蜂起したイマームに民衆は彼に従うこと、他のイマームの条件や、二人のイマームの出現を認めること、などである。

1) サーレフ派

ハサン・ビン・サーレフ・ビン・ハイイ・アルハムザーニー(718 - 784)を支持する一派である。ハサン・ビン・サーレフは禁欲的で、信仰篤く、法学者であり、ハディース学者であった。

同派は優れたイマームが存在しても劣ったイマームの就任を認めている。アリーは優れたイマームであったが、彼は権利を納得づく

で放棄したので、アブーバクルとウマルのカリフ位は正当であると、とらえている。しかし、彼らはウスマーンについては立場を保留している。

シャハラスターニーはそのことについて次のように伝えている。「彼らの見解はスライマーン派の見解と同様である。彼らはウスマーンの件について立場を保留している。彼らの見解は次の通りである。〈彼は信者かそれとも不信者か。彼の権利や、彼が天国を示された10人についてのハディースを聞くと、彼のイスラームや信仰の正しさ、天国の一員となることなどを認識すべきである。しかし、彼が行った事を知ると、彼の不信を考えてしまう。彼のことにについて困惑している。彼のことにについて態度を保留している。彼のことをアッラーにお任せするだけである。〉」

彼らはスンナ派の見解に、最も近いシーア派分派であるとみなされている。

二人のイマーム容認について、条件が同じイマームが二人出た時には、より人徳があり、より禁欲的な者が選ばれる。この言葉は、二人のイマームが出ることを容認している。

最後に、サーリヒーヤはタキーヤ（信仰秘匿）の教義を否定している。なぜなら、真実のイマームはアッラーが命じたことを解釈する者である。彼はアッラーにおいて非難を恐れるものではない。タキーヤをして解釈するものではない。なぜなら、そのことは人々を惑わし、人々をだますことになるからである。

彼らの立場はスンナ派に近いものである。ザイド派の分派の中でも、彼らは最も中庸であるとみられている。彼らはアブーバクルとウマルへの忠誠の誓いを肯定している。サハーバ（教友）を不信者とはしない。ウスマーンについては態度を保留している。

2) スライマーン派

この分派はスライマーン・ビン・ジャリール・アッラキイを支持している。彼らは、イマーム位は協議（シューラー）によると考えている。それはムスリムたちの優れたものたちの中から二人が証人となることによって有効になる。イマーム位は劣った者であっても正当である。しかし、優れたイマームはいかなる状況によっても最も正当である。彼らはアブーバクルとウマルのイマーム位を承認しているが、教友たちはアリーに忠誠の誓いを行うことを怠ったことによって、優れたイマーム位を捨てたことになる。そのことは彼らのイジュティハードの間違いであり、不信でも罪でもない。

この分派の長であるスライマーン・ビン・ジャリールはウスマーンのとった行動により、彼の不信を主張している。同様に、アーイシャ、タルハ、アッズバイルに対してもアリーと戦ったことによって、不信を主張している。当然、この判断はスンナ派と見解を異にしている。

同派は他の分派同様にタキーヤを否定している。

3) ジャールード派

バトリ派はザイド派の中で最も中庸でスンナ派に近いとしたならば、ジャールード派は最も過激でスンナ派から遠い分派である。

ジャールード派はアブージャールード、ズィヤード・ビン・アブーズィヤード・ビン・アルムンズィル・アルクーフィー（767 - 776

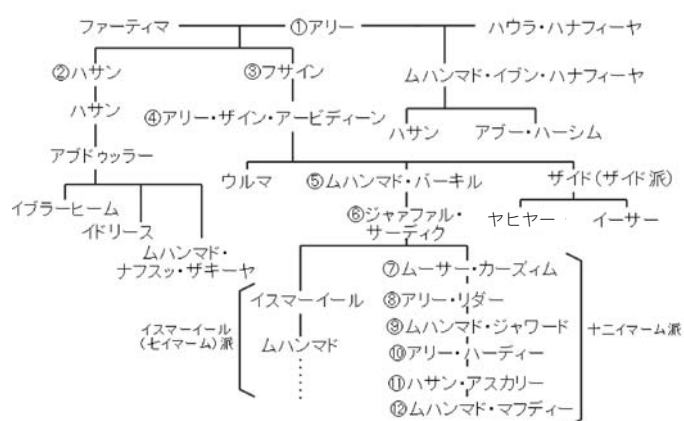
年の間に死去）を支持している分派である。実際、ジャールード派の中にも多くの意見が出てきている。アルアシュアリーは同分派について、さらに内部に多くの分派に分かれ、それぞれに教義を形成していると言っている。

その中でも、彼らの一致する教義、見解は次のことである。

- (1) 預言者からのアリーへの後継者指名はイマームの特質によるものであり、名前によるものではない。
- (2) ファーティマの子孫の公正なイマームが蜂起したならば、彼とともに蜂起することは義務である。これはほかのザイド派の分派の基本的な教義と同じである。
- (3) ハサンとフセインの子孫には預言者と同じ知識が備わっている。この知識は学ぶことなく本性と必要によって得られるのである。彼らの年齢に関係なくその知識は得られるのである。彼ら以外から知識を得ることを必要としない。この考えは他のザイド派分派でも見られないことである。

さいごに

ザイド派はイエメンで三分の一を占めており、サーレフ大統領もザイド派であるが、政策にザイド派の特徴を出すことはなく、世俗的な政策をとっている。そのような世俗的政権の中で、ザイド派の復興運動が出てきた。それは、1962年にザイド派イマームが支配するムタワッキル朝が倒れ、共和制のイエメン・アラブ共和国が成立したが、そのイマーム制の復活を求める運動である。ザイド派はシーア派の分派の中で最もスンナ派に近い分派であるが、ホウスィー派は尖鋭的になり過激な思想を持つようになってきた。ホウスィー派の観測者によると、ホウスィー派の指導者たちは預言者の家系であることを根拠として、イスラーム世界の指導権は彼らにあると主張している。とくにホウスィー派の拠点であるイエメン北部における指導権は彼らにあると考えている。そして、ホウスィー派はザイド派の分派の中でもとくにジャールード派に属するとも言われている。



〔アリー家の系譜〕

参考文献：

- 中村廣治郎「イスラーム 思想と歴史」東京出版会、1977年1月
 セイイェド・ムハンマド・ホセイン・タバータバーイー「シーア派の自画像」森本一夫訳、2007年3月
 島本隆光「シーア派イスラーム」京都大学学術出版会、2007年4月

お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究所
〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14
TEL：03-3947-2419 FAX：03-3947-9416
ホームページURL：http://www.cnc.takushoku-u.ac.jp

拓殖大学 イスラーム研究所 ニュースレター

平成22年9月24日発行 第28号
発行人 拓殖大学イスラーム研究所
編集人 イスラーム研究所主任研究員
柏原 良英

正統四代カリフの時代－アブーバクル（6）

イスラーム研究所 所長 森 伸生

（前回からの続き）

アブーバクルはマッカへ帰ってから、毎日預言者の到来を待ち望んでいた。彼はその間も、新たな隊商を組んで、シリアへと商売にでかけた。旅の先々で気に掛かることは預言者の出現ばかりであった。シリアにてもユダヤ教のラビやキリスト教の修道者の許に立ち寄り、彼らが来るべき預言者を待ち望んでいることを知り、マッカでワラカなどから聴いたことと同じであることに安堵した。いや、マッカで聴いていたときよりも興奮した。マッカでもシリアでも多くの人が真理の到来を待ち続けていた。

導きは必ずやってくるとの確信は日に日に強くなったが、どこからやってくるのか？

マッカにしろシリアにしろ啓典の知識を持っている者達は、この世に預言者が現われる場所はイブラーヒームが聖殿の基礎を築いた場所からであると、ほぼ意見が一致していた。

マッカから、カバ聖殿の地から、預言者が現われる。アブーバクルは複雑な気持ちであった。様々な思いがアブーバクルの胸の内に来去した。・・・

マッカは偶像崇拜の中心地であり、賭博や酒や悪魔の所業が盛んである。果たして、アッラーはこのような乱れた地から預言者を選ぶのであろうか。

だが、医者には病人の家にしか入らないではないか。偶像崇拜の地に唯一神の希望が生まれることこそ大いなる叡知があるのではないか。わが民族にも、預言者が選ばれる叡知が隠されているのではないか。隣人の保護や客人の歓待、男らしさなど伝統的な民族の習俗もさることながら、わが民族には正直で誠実な本性があるのではないか。その本性ゆえに、秘められた真理が伝えられ、わが民族の中から熟考する者が現れ、正道を求める感性が受け継がれてきたのではないか。

それがクッスであり、ワラカであり、ザイドである。彼ら以前にも何世代、何世紀とその真理と感性を受け継いできた人達がいる。彼らは偶像崇拜を拒み、部族が崇拜しているものに服従しなかった。彼らはイブラーヒームの宗教を叫びつつ、アッラーからの言葉を待ち続けていた。来るべき預言者を待ち望んでいた。だが、彼らのうちの誰一人として預言者であると主張した者はいなかった。彼らの信仰、高潔さ、行動のどれをとっても人々の信頼を築くものばかりであった。彼らが一言「我は預言者なり」と言えば、人々は信じたであろう。とくに、偶像崇拜から離れている者達は競って彼らのもとへ集まったことであろう。だが、決して預言者であると主張することはなかった。それも、彼ら自身が誠実である証である。誠実と正直、これこそが我々の民族の特徴である。

わがアラブ民族は自分のラクダを騙すことさえ避けていた。酷い渇きのためにラクダが暴れているときに、詠んだアラブの詩がある。

大人しくさせるためにお前に水を約束したいが、

嘘つきとなる恥辱がそれを妨げる

ラクダにさえ嘘をつくことを恥じた部族であり、ましてやあの純正で高潔な者達がアッラーに嘘をつくことがあろうか。

我々は実に誠実な民族である。預言者は誠実な人以外にはありえない。彼らの予言が真実でないわけがない。予言つまり、カバ聖殿の周りから預言者が現われるであろうという、啓典を識る者達の予言である。・・・アブーバクルの胸のうちにこのような思いが去

来していた。

彼はシリアでの商売も終えて、マッカへの帰り支度を整え始めた。帰途につく数日前、アブーバクルは不思議な夢を見た。その夢とは、月が地平のかなたから動きだし、マッカの上で止まり、そこで、粉々に割れて、マッカの全ての住人の家に落ちていった。それから、それは再び、一つにまとまり、もとの形に戻り、アブーバクルの部屋に下りた。・・・

アブーバクルは夢から覚め、その夢に不思議な力を感じていた。彼は親しくしていた修道者に急いで行き、夢の話をした。すると、その修道者は顔を輝かせてアブーバクルに言った。「彼の時代が来たのだ！」「彼とは誰ですか。私達が待ち望んでいる預言者ですか？」

「その通り。そなたは彼を信じるであろう。そして、彼とともに最も幸せな人物となるであろう。」・・・

（次号に続く）

研究会報告

〔平成22年度第1回イスラーム講演会開催〕

毎年恒例のようになった「イスラームと食文化」の講演会を今年も昨年と同じ六本木のイラン料理店「アラジン」で6月12日（土）午後3時～4時半に行った。講師は有見次郎氏で、イスラームの食の禁じられるもの（ハラーム）と許されるもの（ハラール）の違いの説明から、食事のマナーなどの説明を受けたのちイラン料理を実際に食べながら、出席者たちの自由な質疑応答がそれぞれのテーブルごとに分かれて行われた。

〔平成22年度第2、3回タフスィール公開研究会開催〕

今年度第2回目のタフスィール（クルアーン解釈）公開研究会が、6月19日午後2時より文京キャンパスC館で開かれた。講師は有見次郎氏でクルアーン第6章27～53節を解説した。また第3回目のタフスィール研究会が7月24日午後2時より文京キャンパスC館で開かれた。講師は四戸潤弥氏でクルアーン第6章54～79節を解説した。

محتويات العدد

1. مؤتمر مجلس الحلال الدولي الخامس بماليزيا
نائب رئيس اللجنة العلوم بمعهد دراسات الشريعة : إيزو كوباياشي
 2. تقرير مؤتمر الهيئات العالمية للتصديق على المواد الحلال بماليزيا
عضو لجنة الشريعة بمعهد دراسات الشريعة : توشينو إندو
 3. معرض الحلال الدولي بماليزيا
عضو لجنة الشريعة بمعهد دراسات الشريعة : توشينو إندو
 4. مؤتمر دولي حول موضوع " المسلمون في مجتمع الحضارات المتعددة "
عضو لجنة الشريعة بمعهد دراسات الشريعة : تاكواو أراني
 5. مقال : تأريخ مذهب الزيدية وعقائدها
رئيس معهد دراسات الشريعة : نوبونو موري
 6. مقال : الخلفاء الراشدين (6)
رئيس معهد دراسات الشريعة : نوبونو موري
- أخبار المعهد: الدورة الثانية والثالثة لدراسات التفسير (سورة الأنعام)
المحاضرة الإسلامية الأولى لسنة 2010